連載　河北潟の仲間たち

第15回　シジミ

河北潟とシジミには深い関係があります。旧宇ノ気町の上山田遺跡の貝塚からもヤマトシジミの貝殻がたくさん出土したとのことで、太古から潟縁の人々の食用となっていたようです。干拓前の河北潟でも、シジミ漁がおこなわれていました。シジミ漁は当時の地域の経済を支える重要な産業の一つであり、潟縁の住民にとって、自給自足の貴重なタンパク源でした。シジミ漁の漁業権は河北潟の南部地域（金沢側）にのみありましたが、漁というほどでもないシジミ採りは内灘や津幡でも行われていました。こどもたち、特に女の子は、放課後の家事の手伝いの一つとして、シジミ採りをしたそうです。そうした経験を持つ方に聞き取りしたところ、膝くらいまでのところの深さで、きつく締まった硬い砂混じりの土のところでシジミが良く採れたそうです。聞き取り数が少ないので、生息に適した場所の詳細は不明ですが、泥の多いところはあまり好まないようです。筆者は青森の小川原湖や島根県の宍道湖でみたシジミも、砂の多い底質のところにいたように記憶しています。

干拓以前の河北潟で採れたシジミは、ヤマトシジミでした。ヤマトシジミは、川の水と海の水が混じる汽水に生息します。現在、河北潟は淡水湖になっていて、湖底にはシジミは生息していないか、きわめて少ないと思われます。一方、河北潟の周りの川や水路には、流れのある淡水に生息するマシジミがいます。このマシジミも、ヤマトシジミと同様に食用とされますが、漁獲量はきわめて少なく、市場に出回ることはほとんどありません。筆者は、福井県の今庄の旅館に泊まったときに、運良く朝のみそ汁でいただきました。その他のシジミとしては、琵琶湖流域だけに生息するセタシジミがあります。これは、琵琶湖周辺では流通していますが、もともと多産して名前の由来ともなっている「瀬田川」では、現在はほとんど採れなくなっているようです。滋賀県水産課によるとセタシジミの漁獲量は、「かつて、琵琶湖漁業全体の漁獲量の50%以上を占めており、特に重要な漁獲対象種でした。しかし、その漁獲量は、昭和32年の6,072トンをピークに減少を続け、昭和61年以降には300トンを割り込み、平成11年にはピーク時の約60分の1の104トンにまで減少し」ているということです。

ところで最近、現在河北潟の周辺や干拓地には、外国から入ってきたタイワンシジミが増えています。時折、大発生して新聞の記事になったり、テレビのローカル番組で話題となったりします。（高橋　久）